

# 『新古今和歌集聞書』（増補本）の成立について

近藤美奈子

序

玄旨判

東常縁系の「新古今和歌集聞書」には、所謂「前抄」、「後抄」、増補本の三種類がある。

常縁によつて著された「前抄」は、新古今集の本格的注釈書として最初のもので、他に「原形聞書」、「常縁原撰本」などと呼ばれてもいる。左に、「前抄」諸本中の善本と考えられる細川文庫本によつて奥書を掲げる。

〈奥書一〉

右一冊東野州抄出也哥（カ）いづれもかたはし／在之以彼集作者  
こと葉かき已下書／加之書写後さきすつへきにあらすとて  
／養温遺之相構（カ）之不可外見（カ）為其染一筆／者也

〈奥書二〉

大隅國宮内八幡宮社僧當時有鴻臚郡 與之幕下

此注養温所持之子於城州山科郷之／普讀場一覽之次写之  
文祿五年六月上旬 也足子素然

〈奥書三〉

異本無（別筆）

此集之抄漏脱之哥（カ）以前抄幽齋翁彼追（カ）／加其分別三書抜而為  
一冊此抄号前被抄号／後是子之注付処也以昨日引合彼是可  
／為一抄耳猶注後者也

慶長二年霜月三日

也足子判

〈奥書四〉（他の奥書とは別筆）

右之抄子秘本無相違者也一覽之次加奥書畢／

慶長九年七月廿五日

幽齋玄旨判

平常縁在判

「後抄」は、「前抄」に取り上げられていない歌について注釈の施された書である。内閣文庫本によって奥書を掲げる。

此集略抄前後二冊書写之今一冊者東野州<sup>州</sup>／作云々去年写之了此帖又別抄也抑幽齋翁以彼／常縁抄漏脱之哥引合此抄部分哥次第等注本集加用／捨被為二冊子雖有書写之志彼一冊已以所持之間／被追加之分書拔為別帖以二冊之略抄注前後者也／若於得閑暇時者引合可為一抄耳

干時慶長第二丁酉仲冬初三日猶幽齋抄出之奥書追而可注加之

也足子素然四十二歳

増補本は奥書によると「前抄」に細川幽齋が近衛種家・三条西実枝等の説を取り入れて増補したもので、これは写本と板本

とで伝わっており、特に、板元を変えて数次にわたって板行され流布した。なお、「新古今私抄」「新古今増抄」「八代集抄」などの注釈書に多大な影響を与えた「新古今和歌集聞書」とは、小島吉雄氏の指摘の如く、この書のことである。左に内閣文庫本（写本）によって奥書を掲げる。

〈奥書一〉

此抄出連々諸先達之説少々又／加了見書置一冊也不可他見

／之故筆跡無正跡者也／

〈奥書二〉

右一冊以東野州自筆本令書／写尤可為證本者也

文明二年三月日

宗幸在判

〈奥書三〉

此集之抄出以右之奥書本書寫之／尤可謂秘藏而哥數不幾首漏脱／多之仍年来所聞置之義等今加／之猶常縁抄者以朱加丸点／分而為上下雖似有其恐所記非／尽意之僻案是以惠雲院殿／近衛太閤三光院殿三案西前内府等之御説述／卑詞者也旁以堅禁外見深可／納函底耳

慶長第二季陽下旬

丹山隠士玄旨

「前抄」の〈奥書三〉と「後抄」の奥書とは、也足子素然すなわち中院通勝によってほぼ同内容が同日に記されたものであるが、これらによれば、通勝は前年に「前抄」を写していたので、幽齋が「前抄」に注釈を増補した本から「前抄」の分をさし置いて、その増補分（「後抄」）のみを書き抜いたというのである。これを言い換えると、成立の順序は「前抄」、増補本、「後抄」の順で、内容的には、増補本は「前抄」と「後抄」と

を合わせたものに等しく、したがって、増補本から「前抄」の分を除けば「後抄」が残ることであるが、従来三者の關係はこのように考えられてきた。

ところが、実際に調査してみると、三者の關係は前述の如きではない。その結果、奥書から想定される増補本と現存の増補本とは別物と考えざるを得ないのであるが、その点についてまず検討し、次に両増補本の性格等について述べたいと思う。

「新古今和歌集開書」に採録されている歌数は、「前抄」は二〇一首、「後抄」は四三二首、増補本は「前抄」と「後抄」とを合わせたものに一致するが、「前抄」と「後抄」には一八首が重複してとられているので、六一五首である。

この重複している一八首の注釈内容は「前抄」と「後抄」とでは異なっている。これらが増補本においてどのような在り方をしているかを示したものが次の表である。

表一

〔凡例〕 「前抄」を□、「後抄」を◇、増補本の独自本

文を「」として示し、①、②、③の数字は「前抄」或いは「後抄」における本文の順序を表している。最上段の数字は歌番号（『国歌大観』による）である。

1	前半十へば全部、末尾一文のみ脱ぐ十後半
26	一全部十……十①一部十……十②一部十……
27	①一部十全部十……十③一部十……十②一部十……
36	全部のみ
99	①一部十……十②一部十②一部十①一部十③一部（後抄）は最初と末尾の各一文を除く全部
214	全部十又説に右にある十へば全部、途中少々脱ぐ
375	全部十……十②一部十……十①一部、少々文が変えてある十③一部
614	全部十又説十全部
681	全部十又説十①一部、少々文が変えてある十②一部
737	全部十引歌一首のみ
1030	全部のみ
1078	……十全部
1155	全部、但し少々言葉を補ってある十又の説には十全部
1204	①十……十④十……十②十……十③十……十①
	全部十……十②一部（後抄）は①④を合わせると全部

〔はば全部〕+〔…又説には此〕+〔全部〕

①〔一部〕+〔①前抄〕+〔…〕+〔②一部〕+〔②後半〕+〔後抄〕は全

部)

〔全部〕+〔又説〕+〔はば全部、最初の一文〕

〔全部〕+〔全部〕

この表を見ると、増補本における「前抄」と「後抄」の在り方はかなり複雑な様相を呈している。単純に「前抄」と「後抄」が併記されているのは寧ろ少なく、「前抄」或いは「後抄」の一方しか書かれていない場合や両者の注釈を適宜順序を入れ換えたり省略増補したりする場合が多い。奥書に述べる如く増補本から「前抄」を除けば「後抄」が残るといった関係は決して成り立っていないのである。それは、三六・一〇三〇番の増補本の注を見ると「前抄」の分しか採られていないので、増補本から「後抄」を書き抜くことができない点からも明らかである。増補本における一八首の注釈の在り方は、「前抄」と「後抄」とをもとにして取捨選択して作られていることを示している。「前抄」と「後抄」とから増補本は作られても、その逆はあり得ないのである。したがって、成立の順序は勿論、「後抄」が増補本に先行していると考えられる。

このように奥書の内容と実際の注の在り方とが食い違っているので、現存の増補本は、奥書から想定される増補本ではないと考えられる。そして、奥書を信ずるならば、増補本とは別に、それに先行する原増補本とでも呼ぶべき書が存在していたと推論されるのである。そこで、以下、奥書から想定される増補本を、原増補本<sup>1)</sup>と仮称することにしたい。

## 二

本章では前述の一八首について、増補本が「前抄」と「後抄」をどのように取捨選択補訂して作り上げられているかを見ることにする。以下、引用文は次の略号を用いる。

(増) Ⅰ 増補本、内閣文庫本に拠る。

(前) Ⅱ 「前抄」、細川文庫本に拠る。

(後) Ⅲ 「後抄」、内閣文庫本に拠る。

撰政太政大臣

Ⅰ みよし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は来にけり  
(増) よしのは山ふかき所にて外よりは春もそくいたるへし  
されとも天不曾して四時行といへる本文のことくか、る  
深雪のうちにも春の色はみえ侍るなり長高く見様幹なり

巻頭のうたなれば無上のすかたなるへし此歌を一部の巻頭にをけるこゝろは一首のうちに題号の心をふくめり五文字よりふりにしさとにといふに古今の二字を云春はきにけりといふに新の字の心有深山のみ雪のうへにて見たてたる初春の心をもしろし本哥

／＼いつくとも春の光はわかなくにまたみよしの、山は雪ふる

またふりにし里といへるは吉野は皇居のあとなれば古郷といふなり本哥は

／＼みよしの、山の白雪つもるらし古郷さむくなりまさる也

古郷をふりにし里とよめるは

／＼日の光やふしわかねはいそのかみふりにし里に花も咲けり

(前) 吉野は山深き所にて外よりは春も遅く至へしされとも天

不曾して四時行といへる本文のことくかゝる深雪の内に

も春の色は見え侍る也長高く大様なる林也巻頭の哥なれば

は無上の姿なるへし（宋に輸入）深山深雪の上にてみたてたる初春

の心おもしろし本哥

／＼いつくとも春の光はわかなくにまたみよしの、山は雪

ふる

又ふりにし里といえるは吉野は皇居の跡なれば古郷と云也本哥は

／＼みよしの、山の白雪つもるらし古郷さむくなりまさる也（宋に輸入）古郷をふりにし里によめるは

／＼日の光やふしわかねはいそのかみふりにし里に花も咲けり

(後)

此哥を一部ノ巻頭に置ル心ハ一首ノ内ニ題号ノ心ヲ含メリ一五文字ヨリふりにし里にト云ニ古今ノ二字ヲ云春ハ来ニケリト云ニ新ノ字ノ心アリ其外別ノ聞書ニ同シ

増補本の注釈は、「前抄」の中間に「後抄」を取り込んで形成成されている。「後抄」の注はこの歌が巻頭に置かれた点について述べているが、「前抄」の三行目にも巻頭歌ということに触れた「巻頭の哥なれば無上の姿なるへし」との一文があるので、その文の後に「後抄」をもってきて注釈としての姿を整えたものであらう。

太上天皇

99 さくら咲く遠山鳥のしだり尾のながながし日もあかね色かな

(増)

惣して賀という事は四十の歳より上十年にみつへき事をかする事也親の賀を子孫なとし師匠の賀を弟子なとする

事也此釈阿賀は天子より給はせ給也歌道の御師徳故也仁和御門僧正遍昭に七十賀を給はりたる例なり依之定家の花山のあとを尋るゆきの色にとしふる道のひかりをそみる

此哥千載集に入侍り俊成の賀を建仁二年八月云々御製の心も釈阿を桜花にひしてかのおわひ千万歳を送るともあかしとあそはされたり如此故慮の御めくみ有かたく釈阿の名替なり源氏に匂兵部卿のうきふねの君を春の日のみれともくあかぬと云詞などおほしめしめてられたるにや本哥はあし曳の山鳥の尾のしたり尾のといふ人丸の哥をとられたり桜さく遠山鳥のしたりをのといひいたされたるよりなかし日もあかぬと詞つかひゆうとして心又こまやかなり殊勝の御哥なり

(前) 花も近くみるよりも遠山又霞の間より見たる花なを感情ふかく侍ると也此御哥尺阿に九十の賀給はせける時の哥なれば俊成卿の齡の事をあかす覚しめすよし也殊更此道の御師範たる故に如此よませ給へるなるへし桜さく遠山鳥のしたり尾のといひ出されたるよりなかし日もあかぬ色詞つかひゆうとして心又こまやかなる御哥也本哥は足引の山とりのおのしたりをのなかし夜を独か

もねんと云人丸の哥をとられたり殊勝なる御哥也

(後) 人丸のなかしよを独かもねんヲ本哥トシテあそはされたる御製也惣して賀ト云事ハ四十歳ヨリ上又十年二滴スヘキコトヲ賀スル事也親ノ賀ヲ子孫ナトシ又師匠ノ賀ヲ弟子ナトノスル事也此尺阿の賀ハ天子ヨリ給ハセタル也哥道ノ御師範ノ故也仁和御門僧正遍昭に七十の賀を給りし例也依之定家御花山の跡を尋る雪の色に年ふる道の光をそ見る俊成の賀は建仁二年八月云々御哥の心は桜花を尺阿に比して御齡千万歳を送るともあかしとあそはされたり如此故慮の御めくみ有かたく釈阿の名替なり源氏に匂宮ノ浮舟君を春の日の見れともくあかぬと云詞など思食出られたるにや賀の時は屏風を新調ある事也

増補本では、「後抄」中に引かれている定家の「花山の：」の歌について「此哥千載集に入侍り」と補って「後抄」の大部分を採り、「前抄」の後半は註釈本文の順序を入れ換えてすっきりとさせて採っている。

ここで注目すべきなのは、「前抄」の前半と「後抄」とがほぼ同内容であるのに、「前抄」を採らずに「後抄」を採っている点である。勿論その理由は、「後抄」の注釈の方が詳細であるためと思われるが、このような所に、「前抄」の注を絶対視

してそれに盲従するのではなく、「前抄」の不足を補って余りある注があればそちらを採用するという幽齋の柔軟な態度が窺われるのである。

又、「前抄」と「後抄」を異説併記という形で掲げてある六一四・一四三三番の場合も、「後抄」を先にあげて、「前抄」よりも「後抄」の注釈を前面に押し出しており、ここにも、自分なりの選択を働かせるという幽齋の態度が現れていると思われる。

摂政太政大臣

737 濡れてほす玉ぐしの葉の露霜に天照るひかり幾世経ぬらむ

(増) ぬれてほすとは露霜といはんとての詞のおこり也玉ぐしの葉とは榊の一名也(補入)あまてる光は大神宮の御事也神木なれは幾年をふるらんと也

ぬれてほす山路の菊の露の間にいつかちとせを我は経にけん

(前) 玉くしは榊なり伊勢にかきりて榊を玉くしと云也ぬれてほすとは露にぬれてひる間にも千世はふへきといふ事也ぬれてほす山路のきくの露のまにいつか千とせをわれはへにけん此哥をとりて俊成卿  
仙人のおる袖にほふ菊の露うちらはらふにも千世はへぬ

へし 天照光といへるは伊勢大神の御事也

(後) ぬれてほすトハ露霜トいはんとての詞のおこり也玉ぐしの葉トハ榊の一名也天照光は大神宮ノ御事也神木なれはいくとせをふるらんと也

増補本には「後抄」の全部と「前抄」からは古今集の素性の本哥のみが採られている。「前抄」の最初と最後の一文は「後抄」の内容とも重なっているが、「前抄」には必ずしも適切とは言えない「ぬれてほすとは露にぬれてひる間にも千世はふへきといふ事也」という注や抄出歌に直接関わらない俊成歌の引用などがあり間のびしているので、注釈として締まりのある「後抄」の方を採ったのであろうか。

前大僧正慈円

1327 心こそゆくへも知らね三輪の山杉のこずゑのゆふぐれの空

(増) 三輪を尋るといふ道路(マヤ)によめり

我やとは三輪の山本(マヤ)こひしくはとふらひきませ杉たて

これをとりて伊勢哥に  
三輪の山いかに待こむ年ふとも尋る人もあらしとおも  
へはと讀るよりの事なり此哥ゆくゑもしらねといへるは

尋る心也尋恋といふ題をまはしたる哥也12本哥のこくと尋  
きませとあるほとにたつね侍はちきりし人は見えす杉の  
梢はかりありといへり尋恋の心本哥のとりにやう妙也

(前) 三輪を尋ると云道地によめる事は伊勢か歌に

／＼みはの山いつか待みん年ふとも尋ぬる人もあらしとお  
もへはとよめるよりの事也此哥行衛もしらねといへるは  
尋心也尋恋と云題をまはしたる哥也わか尋る心は杉の梢  
の夕の空のこくと何のしるへもなく證跡もなしと云心也  
我宿は三わの山もと恋しくはとふらひきませ杉たてる門  
本哥のこくと尋きませとある程に尋侍レハ契し人は見え  
す杉の梢はかり有といへり尋恋の心本哥の取やう妙也

(後)

増補本では「前抄」と「後抄」とを交互に並びかえて、本歌・  
引歌などの指摘も整備してある。そして、「前抄」と「後抄」  
とで解釈が異なっている「杉のこずまのゆふぐれの空」につい  
ては、象徴的な解釈の「前抄」ではなく、実景として解釈して  
いる「後抄」の方を採っている。ここにも、幽齋なりの選択が  
働いていると言えよう。

ところで、増補本における補訂の部分について見ると、独自  
の新たな注を付け加えているところはなく、すべて「前抄」及  
至「後抄」の注釈を承けた上で、「冒語道断の所なり」(二六番)

とか「されども唯前の心可然歎」(同)と評す、引用歌について  
出典や語句の意味を補足する、「後抄」で断定している箇所を  
「といひ傳へたり」(二七番)や「聊秀句の心も有歎」(二二〇  
四番)として穏当にする、「前抄」や「後抄」の注釈本文の文意  
を通り易くするために言葉を補う、或いは「前抄」と「後抄」  
を異説併記という形にするために「又説」などの言葉を補うと  
いった具合である。

つまり、当該の一八首について言えば、増補本の注釈はあく  
まで「前抄」と「後抄」とによって形成されているのであって  
取捨選択補訂もその範囲内のことである。

### 三

今まで見てきたのは「前抄」と「後抄」に重複する一八首に  
ついてであるが、増補本には他に「前抄」を引いている一八三  
首と「後抄」を引いている四一四首が存している。それら  
についても「前抄」及至「後抄」の注釈が増補本においてど  
うに採られているかを吟味する必要があると思われる。比較  
調査の結果、次の事が知られた。

まず、増補本と「前抄」の注釈の異同については、内容はほ



は同じだが注釈本文の順序の異なるものが四首、増補本に少々  
の増補の見られるもの一二首、逆に増補本に少々省略の見ら  
れるもの六首、非常に大きな異同の見られるものが四首ほどあ  
る。ここでやはり注意されることは、増補本に「前抄」を引く  
際にも、そっくりそのまま引いているのではなく、一部ではあ  
るけれども手が加えられているという点である。

そこで、大きな異同のある四首について、増補本においてど  
のように手が加えられているかを見ることにしよう。

宮内卿

76 薄く濃き野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ

(前) 此哥表裏あり表は雪の早く消遅く消たることくに若草の

遅速ありてもえ出る由也裏の心は四季を感じるに春は花

夏は時鳥秋は紅葉冬は雪ほと面白物はあらしと思ひつる

に如此をそくはやく雪のきえし跡のくさはまでそのほと

みえて野へのけしきのめつらしく思ふわか心まで村く

となる事よとよめる奇特也本哥は

みとりなるひとつ草とそ春は見し秋はいろくの花に

そありける

(増) みとりなるひとつ草とそ春はみし秋は色く花にそ有

ける

此哥四季をかんする心あるうたなりと云説あれとも唯雪  
のはやく消をそくきえてその消たることくに若草の遅速  
ありてもえ出るよしをいへり野への雪のむら消たりし景  
気のおもしろかりつるをそのなこりをみせてあとまで、う  
すくこく草葉の色にあらはしたる所をかんしてよめる歌  
也

増補本は「前抄」の一部を採り、一部は否定し、一部は「前  
抄」によらずに注するという形になっている。「前抄」に述べ  
られている「表裏の心」のうち、増補本は「表の心」は採って  
いるが、「裏の心」については「此哥四季をかんする心あるう  
たなりと云説あれとも……」と否定しているのである。

左衛門督通光

513 いろ日さすふもとの尾花うちなびきたが秋風に鶉啼くらむ

(前) 麗の尾花夕日に打なひく景氣面白き折節鶉の鳴を聞て秋

はたか秋そなれか時分にてはなきかとかめていへる哥

也鶉をうきといふ方へとりていふ也下の心はわか時をさ

へうしと侘ぬれは身の上のかなしさを思ひやれとうつ

らとむかひていへる心切に幽に侍り誰か秋風にとはとか

めたる詞也

(増) ふもとのを花夕日に打なひく景氣面白き折節うつらのな

くを聞てあきは誰か秋そなれば時分にてはなきかととめて云る哥也。

増補本では、「前抄」の「鶉をうきといふ方へとりていふ也下の心は……」以下の注を採っていない。

七六番や五二三番の如く、「裏の心」を否定したり、「下の心」を採らなかつたりするのは、近世の本居宣長等に見られるような全面的否定ではなく、注の内容として例えば「穿ちすぎ」という理由からの否定だと思われる。というのは、「下の心」が述べてある「前抄」の注であつても、

撰政太政大臣

1028 いそのかみふるの神杉ふりぬれど色には出でず露も時雨も

(増) ……露も時雨もとは露にも時雨にもと云義也下の心は涙也……

藤原元真

1059 霜こほりころも解けぬ冬の池に夜ふけてぞ鳴くをしの一聲

(増) この哥おもての理は冬の夜の空さえあかして池なとも水侍るよしをまついひたてたるきとく也如此讀るたくひおほし下の心はいと、いねかたき冬の夜にをしの鳴を聞てをし鳥のつかひ有さへこの夜はのかなしさになへかねてなく也我は猶独ねなれはことほりと云心也……

1454

春を経てみゆきに馴るる花の蔭ふりゆく身をもあはれとや思ふ  
藤原定家朝臣

(増) ……下の心は花を天子にたとへたてまつりて我先祖の高官に侍りし中にも積阿四代までの師徳にまいるるその子なれともやうく中納言にて老はてぬる事を不便とおほしめされよと歎たる哥なり誠に有心昧也

のように適切な注であれば増補本に採られているからである。こういう点からも、たとえ「前抄」の説であれ否定すべきところは否定し、採るべきは採るといふ幽齋の立場・態度が窺われる。

式子内親王

484

千たびうつ砧のおとに夢さめて物おもふ袖の露ぞくだくる

(前) 此夢覚てといへるは骨高なる事也秋のかなしさのあまり

飛花落葉を親想する夢の如く也能親念すれば秋のつらさ

もことほりに成て還てなくさみと成侍る所に砧声のたか

く（宋で補入）と聞たるにちやつと其夢を忘たるを夢覚てといへり

露そくだくるとはこほる、事也千度とは只砧の音をつよ

くいひたてんためたくるも砧聲に對して感情をつよ

くいはん為也言語道断の哥也

八月九月正長夜千聲萬聲無止時

(増) 此夢さめてといへる骨高なる事也秋のかなしさのあまり飛花落葉を觀想する夢の事なり能觀念すれば秋のつらさもことほりになりてかへりてなくさみと成待る所に砧のをとのたか／＼とひ、きたるにちやとその夢をわすれたるを夢さめてといへり露そくたくるとはしほる、事也千度とは只砧の音をつよくいひたてんため也くたくたるも砧聲に對して感情をつよくいはむためなり官誦道斷の哥也  
八月九月正長夜千聲萬聲無止時

又の説には秋のかなしみに身もくつをれて聊打まどろみたる夢をきぬたの聲にうちさまされて物おもふ袖の露のくたくるといへりくたくるといふ詞はきぬたの音に夢をさましたる折節なればさらに千聲萬聲のきぬたに袖の露もくたくるやうなりと云り

増補本では「前抄」に「又の説」を付け加えている。この「又の説」の出典は今のところ不明であるが、とにかく、「前抄」の注釈では飽き足らずに解釈として穩當な異説を付け加えている点に注目される。

前大僧正慈円

1755 山里に契りし庵や荒れぬらむ待たれむとだに思はざりしを

(前) 山里にと有て又庵とよめる事は前に人の住たりし所へ行

て我と必来て庵をならへんといひたる心也其来りて住へしと契りし時にはまたれん事もあらしやかてゆかんとおもひしにそのま、とはて程久しくなればすまんと思ひし庵やあれぬらんと也此庵の荒れぬらんとは造ておきたる庵ならず必きてならへんと思心の庵也荒るとは心のかはりぬらんと云事也僧靈徹詩云、相達盡道休官去林下何曾見一人

(増) や山里にとありて又庵とよめることはまへに人の住たりし所へゆきてわれもかならずきていほりをならへんといひたるこ、ろなりそのきたりてすむへしとちきりし時にはまたれんこともあらしやかてゆかんとおもひしにそのま、とはて程久しくなればすまんと思ひしいほりやあれぬらんとなり此いほりのあれぬらんとはつくりて置たる庵ならずかならずきてならへんおもふこころのいほりもある、とはこ、ろのかはりぬらんといふ心也僧靈徹詩云、相達盡道休官去林下何曾見一人

又説にやまさとにすむへきといほりなとをむすひて世のうき時は日をもうつすまじきやうに思ひしにとかくまきれてすき行はそのいほりもいまはあれぬらんとなりかく

はおもはさりしものをといへる心也又山里と置て下にい  
ほりとあり山里といふは所の惣名いほりはそのうちの庵  
なりと師説なり

これも増補本は「前抄」に「又説」を付け加えているが、こ  
の「又説」は猪苗代兼載作「新古今拔書抄」の

山里のうちに、そこへ住へき庵などやくそくして、世  
のうきときひをも、うつすまじきやうにおもひしに、とか  
くまきれて、はやその庵、今はある、程にそ成ぬらんと也  
心をふかくつけてみるへし。

に拠っている。<sup>(注)</sup>「山里に契りし庵」について、「前抄」は「造  
ておきたる庵ならず必きてならへんと思心の庵也」という解釈  
であるのに対し、「新古今拔書抄」は実際の庵と解釈している  
という違いがある。増補本は「新古今拔書抄」の実際の庵とい  
う説をより強化したものを「又説」としてあげ、更に師説をも  
載せているのである。

「後抄」には「新古今拔書抄」や幽斎の外祖父清原宣賢の「新  
古今注」がとり入れられているが、特に「新古今注」を引いてい  
るのは、黒川昌亨氏の指摘された如く神祇・釈教部を初めとし  
てかなりの数に上る。したがって、増補本中に見られる「新古  
今注」や「新古今拔書抄」の影響は、「新古今注」などの増補

本への直接関与ではなく、「後抄」(「後抄」が書かれていたはず  
の原増補本)を介在しての間接的影響とみるべきである。

ところが、一七五五番についての注釈は「後抄」にはないの  
で、この注に関しては、増補本が「新古今拔書抄」の注釈を「又  
説」として直接とり入れたか、或いは師説をとり入れる際に師  
説を通して間接的にとり入れられたとも考えられるが、今のと  
ころ私は前者の如く考えている。

しかし、いずれにしろ、四八四番や一七五五番の注釈からは、  
幽斎が単に「前抄」と「後抄」の注釈をもとにしてそれらを整  
理しただけでなく、それ以外の注釈やそれまで聞き置いてあつた  
師説などを参照しながら増補本を作成したということが指摘で  
きよう。

次に増補本と「後抄」との異同についてであるが、内容はほ  
ぼ同じで注釈本文の順序の異なるもの三首、増補本に少々の増  
補のみられるもの一首、逆に少々の省略のみられるもの四首  
で、大きな異同のあるのは次に掲げる二三三番のみである。

藤原定家朝臣

1332 尋ね見るつらき心の奥の海よ汐干のかたのいふかひもなし  
(後) 忍ふ山しのひてかよふ道もかな人の心のおくも見るへく  
人の心中へ分入道もかな深サ浅サヲみんといへる哥也是

は尋みるに人ノ心ハ塩干の瀉ニテ洩キトよめり

伊勢鳴や塩干のかたにあさりてもいふかひなきは我身成

けりト云哥を下ニふまえてよめり尋みればつらき心の奥

ナレハいふかひなしと云にや

(増) 忍ふ山忍ひてかよふ道もかな人の心のおくもみるへく

増補本には引歌しかとられていないので不審に思い、内閣文庫本以外の写本や板本を調査してみたが、その限りでは総ての伝本がこのようになっていた。「後抄」の注釈は妥当なものと思

われるので、この注を排除したというより、書写段階での脱落と考える可能性も大きい。しかし、伝本処理の上では、何如なる理由からかは明らかでないが、増補本作成段階で幽齋がこの注を切り捨てたものと解する他なさそうである。

一三三二番の如き例はあるにしても、全体として「後抄」と増補本とに大きく関わる異同はないと旨ってよいと思われる。

また、そのことは「後抄」と増補本との立場の近さを窺わせるのである。

#### 四

奥書から想定される原増補本は何如なる形態をしていたので

あろうか。

二章に掲げた一番の歌の「後抄」末尾には通勝の手になると覺しき「其外別ノ問書ニ同シ」という一文が見られるが、これは「後抄」の分を書き抜いたとある奥書を裏付けていると思われるので、原増補本は現存の「前抄」や「後抄」のように別冊の形ではなく、現存の増補本に近い形態だったと考えられるのである。しかし、増補本よりは機械的に作られていたのではないかと思われる。

というのは、二章において九九・七三七番を取り上げて述べたように「前抄」と「後抄」の注釈内容に重なる部分があるからである。他に、二七・三六・二一四・三七五・六八一・一四三三番においても同様である。このように注釈内容に重複があるということは、注釈の吟味がなされていないことを意味する。そして、それは原増補本が書かれる以前に既に「後抄」の分がまとめられていたことも物語ると思われる。もし、原増補本が、「前抄」を書写しながらその場で注釈を書き加えるという製作過程を経て出来上ったものならば、当然注釈の吟味がなされていると考えられるので、重複部分など存しているはずもないからである。つまり、原増補本は「前抄」と既に出来上っていた「後抄」とを一冊に合わせたものだと考えられるが、

そこには両者を有機的に結びつけようとした意図は窺われないのである。このような点から、原増補本は手控え・草稿として作られたものだったと考えられる。それだからこそ、未だに原増補本の存在が確認されていないのではなからうか。

ところで、久保田淳氏は「新古今和歌集全評釈」の「新古今和歌集研究史序説」において「後抄」の著者を未詳とされているが、「後抄」の奥書に拠れば、通勝によって幽齋の増補本から書き抜かれて初めて「後抄」という形になったのであるから、一応「後抄」は幽齋の手になるとみられる。勿論、既述の如く「後抄」は「新古今抜書抄」や「新古今注」を引いている箇所が数多く見受けられるし、増補本の奥書にも近衛種家や三条西実枝等の説を取り入れたとあるので、どこまでが幽齋自身の独創であったか疑わしいものの、「後抄」にある四三二首の注釈中「前抄」と重複しているのが僅か一八首ばかりというのは、やはり増補本の奥書に記されているように、「前抄」を前提としてそれを増補するために書かれたとしか考えられないと思われる。したがって、「後抄」は幽齋によってまとめられたと解してよいのではなからうか。

以上、増補本について述べてきたことをまとめて、結びとしたい。

増補本は「前抄」と「後抄」とに重複している一八首については取捨選択補訂を行い、「前抄」「後抄」のみを採っている箇所についても、注釈本文の順序を変えたり、部分的に増補・省略をしたり、特に「前抄」には大きく手を入れたところもあった。その数は全体からみればそれほど多くはないが、増補本は、原増補本に整理を加えたものである。就中、「前抄」にまで手を加えていることは注意される。

結局、増補本は常緑の「前抄」の延長線上に位置し、それを充実にせよとしたものと考えられるが、それは幽齋という人物のフィルターを通して成立した新古今和歌集の注釈書だという点に一つの意義があると思われる。したがって、「前抄」が新古今和歌集の注釈書の嚆矢としての重要な位置を占めるのは又異なった意味で、増補本は新古今和歌集の注釈史上に重要な位置を占めるものと言えよう。

注 (1) 伝本によって奥書の数が異なり、〈奥書四〉は細川文庫本のみ存している。詳しい点や各伝本の系統等については、拙稿「新古今和歌集開書（前抄）について」（『和歌文学研究』第四一号、昭和五四年一月、田姓中川）を参照いただきたい。

(2) 「新古今和歌集注釈書の話」（『新古今和歌集の研究』星野書店、昭和一九年五月）

- (3) 『中世文芸叢書5 新古今注』(広島中世文芸研究会、昭和四十一年一月)
- (4) 沢山修氏も「細川幽齋増補」「新古今集開書」序論(「国語と国文学」昭和五四年七月)において指摘しておられるが、後述の如く、私は増補本への「新古今抜書抄」等の影響は「後抄」を介在しての間接的関与と考えており、その点を考慮した上での調査なので、「新古今抜書抄」等の影響を増補本への直接関与とされる沢山氏とは調査の手続きが異なるものと思われる。
- (5) 注3に同じ。
- (6) 講談社、昭和五二年二月。